

# 第6回四国あるき遍路の旅



平成16年2月27日（金）～29日（日）

四万十川の夕景

第6回を数える四国あるき遍路の旅も、今回で土佐「修行の道場」打ち上げの旅となります。室戸からはじまり、風の中、雨の中、そして広い空と海に抱かれつつ、四万十・足摺、そして県境の松尾峠越えで、伊予の国「菩提の道場」に足を踏み入れます。

平成16年はうるう年。うるう年に八十八番から逆打ちの遍路をすると、お大師さんに会えると言われていています。まだまだ八十八ヶ所途中の私たちは、同行二人とはいえお大師さんには出会えないようですが、未知なる可能性を開花させた人、逆に足腰の衰えを感じた人など、それぞれにもう一人の自分と出会いつつあるような気がします。

修行の道場、打ち上げの旅の記録をまとめてみました。

| 期日 | 曜日    | 一人予定 |  |  |   | 食事・宿日  |   |  |
|----|-------|------|--|--|---|--|---|--|
| 1  | 2月27日 | 金    | 830集合<br>羽田空港<br>1325<br>高知駅発<br>1526<br>窪川駅発        | JAS243便<br>09:25発<br>JR土讃本線<br>特急あしき1号<br>くろしお鉄道毛線 | 1045<br>高知駅着<br>14:28<br>窪川駅着<br>16:32<br>中馬駅着                  | 11:00<br>高知駅発<br>一徒歩<br>約0.8km<br>37番岩本寺<br>一徒歩<br>約1.8km<br>中馬駅発                        | 《空路連絡バス》<br>約40分<br>11:30<br>はりまき着<br>岩本寺発<br>17:00<br>ホテル着 | 昼食は「藤橋亭」でランチ<br>夕食は「喜」にて<br>中村プリンスホテル<br>中村市性町4-1<br>Tel 0880-35-5551                  |
| 2  | 2月28日 | 土    | 630<br>ホテル発<br>11:45頃<br>38番金剛福寺<br>1525<br>中馬駅発     | タクシー<br>約1.8km<br>くろしお鉄道<br>約1.5km<br>一徒歩<br>約2km  | 7:00<br>中馬駅発<br>13:13<br>足摺駅発<br>15:43<br>平田駅着<br>17:32<br>平田駅発 | 《バス》<br>7:47<br>以布利バス下車<br>15:00<br>中馬駅着<br>一徒歩<br>約2km<br>39番延光寺<br>17:42<br>宿毛駅着(送迎バス) | 一徒歩<br>約1.5km<br>17:00<br>延光寺発<br>18:00<br>国民舎着             | 朝食はホテルの弁当を車中にて<br>昼食は足摺にて<br>国民舎「椰子」<br>〒788-0014<br>高知県宿毛市大島17-27<br>Tel 0880-65-8185 |
| 3  | 2月29日 | 日    | 745(送迎バス)<br>国民舎発<br>13:00<br>礼所前バス停<br>1625<br>松山駅発 | 一徒歩<br>遍路古道を通過、愛媛県。約10km<br>《バス》<br>《バス》<br>《バス》   | 一徒歩<br>11:06<br>一本松町バス停<br>14:20頃<br>宇和島駅着<br>16:50<br>松山駅着     | 11:06<br>《バス》<br>一徒歩<br>約10km<br>一本松町バス停<br>14:48<br>宇和島駅発<br>18:15<br>松山駅着              | 11:30<br>40番自在寺<br>16:06<br>松山駅着<br>19:30<br>羽田空港着 解散       | 朝食は「かき本陣」にて<br>夕食各自  |



2月27日(金)

朝、9時25分に羽田を出発して、今回最初の札所「三十七番・岩本寺」に着いたのは、およそ14時45分。途中、高知市内で昼食を摂ったとはいえ、約5時間半の移動時間となりました。歩きたくてうずうずしていた人、お待たせしました。とはいえ、駅から札所までは1キロ足らず、物足りなかったことでしょう。

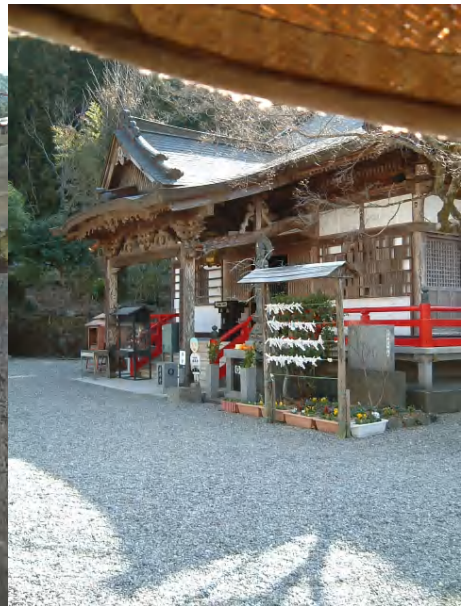
四万十川の上流に位置する窪川という町の中を歩くのですが、昼下がりのせいばかりではなく、人通りもなく極めて極めて静かな街です。駅前に、鎮座するということが似合う、高知信用金庫の御影石造りのバブリーな建物が、周囲の静けさとまったく不釣り合いに駅舎と対峙しています。歩き始め、程なく札所に着きましたが、静かな町並みから角を曲がったところに、庫裏の大きさがやけに目立つ岩本寺。う〜ん、これまたバブリーでした。



窪川に向う車窓から土佐の海をパチリ



「いよいよ歩くぞ!」と、窪川駅前にて



帯同カメラウーマンの石川先生が欠席のため、地図を見たり、時刻表を見たり、旅程表を見たり、シャッターを押したり、木魚を叩いたり、住職は大忙し。写真の不出来はご勘弁ください。



中村に向う途中の車窓から

岩本寺を後にして、窪川駅に戻って、土佐くろしお鉄道の各駅停車に乗り、一路今晚の宿泊地「中村市」に向かいました。午後5時過ぎ、中村プリンスホテルに到着です。名前を聞くと豪華ですが、西武系ではありません。徳島で泊まったホテルは、地方都市ながら西武系のプリンスだったので、勘違いした人もいたかもしれません。

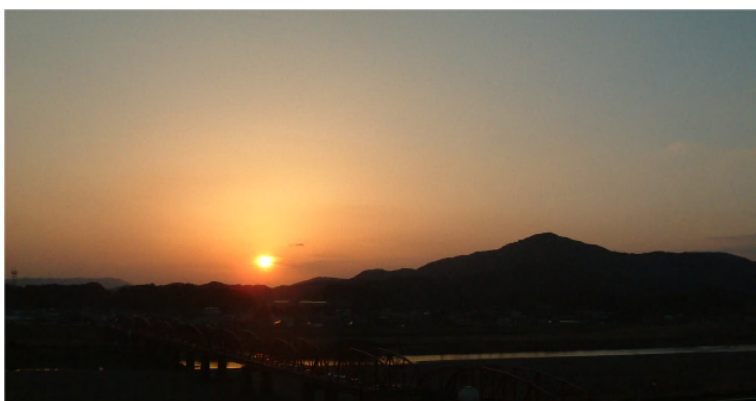
四国遍路をしながらプリンスホテルなんて、と思う人がいます。しかし、東京から四国に飛んで

宿泊しようとする、1泊2日のフリーのツアーが一番安いのです。早割り、超割などを使って、遍路宿に泊まるより安いのですから……。なにしろ、2泊3日を重ねて、歩きを主体にした遍路をめざすには安いが一番。しかし、これも東京近郊に住んでいるおかげだと思えます。東北に住んでいたら、東京まで出てきて、それから四国へ行くわけですから、とても高額な旅になってしまいます。となると、四国に何回も足を運ぶわけにも行かず、八十八ヶ所もバスで回らざるを得なくなるのかもしれない。私たちは本当に恵まれていると、感謝しながら一步一步歩いてまいりましょう。

昔、「ぜいたくは敵だ。」といいました。それが、なんでも効率よくできるということが良いことだというように変わり、早いことがいいことだと錯覚を起こしてきました。いま、歩くことは、効率よく早く過ごしていて、見逃してしまったことや、見過ごしてしまうものを再発見する旅です。「ふと見れば、なずな花咲く、垣根かな」ではありませんが、道端の小さい花の美しさにこころ奪われるような時があり、なんどころ豊かな・・・と思う瞬間。ああぜいたくな時間だなと、「不便はぜいたく。」と時代は変わっているようです。

くろしお鉄道の各駅停車も、もう二度と乗車する機会はないかもしれません。二度と泊まることがないかもしれない中村プリンスホテルからの夕陽が、四万十川の川面に反射して太陽が二つ見えるなんていう景色もまた、かけがえのない私たちの人生と同じだなあなんて思えるのも、見過ごしてしまっている日常の再発見といえる気がします。

その各駅停車に乗り込むときにワンカップを忍ばせて車中で一杯なんて、稲田さんもおつなことをしていました。旅に出て、水が合わないということばがありますが、稲田



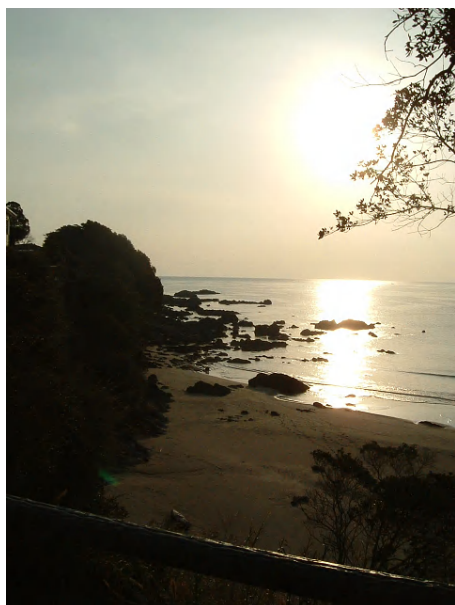
さんは水ではなく、酒が合わなかったらしく、その晩から体調不良を訴えました。晩御飯のさばの刺身を楽しみにしていた稲田さんが、さばの刺身の味がわかったのかどうかは不明です。かつおのたたきは、さすがの味でした。

2月28日(土)

中村駅前を7時のバスに乗り、足摺岬の付け根「以布利」に向かいました。

朝食は、ホテルが用意してくれたお弁当を車中でいただきました。立派なお弁当をいただき、片付けているとバスの運転手さんが「まとめておいたら後で捨ててあげるよ。」なんと親切なんでしょう。一同感激。

バスはいくつもの停留所を通るのですが、乗降客はおらずほぼノンストップ状態。大岐の浜バス停も乗る人がいないのですが、運転手さんはバスを停車させます。すると、「ここはとても景色のいいところだから、降りて見てきていいよ。」と言うではありませんか。早朝起床、バスに乗るや腹ごしらえを済ませ、車



中は暖房でぽかぽか、うたたねをしていた人も、何かかと思いつつ続いてバスを降りると、その景色の素晴らしさに感嘆の声、声、声。左手からは昇ったばかりの太陽が黒潮の海に反射して、遍路たちの顔を照らします。正面から右手に伸びる砂浜は、昔のお遍路さんが歩いたところだそうです。砂浜から先、海に突き出た高台の半島はこれから向う足摺の岬に続いています。昔の遍路も、砂浜から足摺を遠く見て歩いたであろうと想像に難くありません。

大岐の浜を過ぎると5～6分ほどで「以布利」でした。ここで、体調不良の稲田さんと大きいお姉さん二人はバスで足摺に先回り。再び運転手さんが、「歩く人は余計な荷物をバスに乗せていきなさい。足摺に荷物を下ろしておいてあげるよ。」たびたびの親切、身に

みました。

「以布利」バス停は、漁港のまん前。漁港に出て右に行くと、石ころだらけの海岸を抜け、先ほど見た高台の半島に登る急な坂道。いよいよあるき遍路のはじまりです。



# 【 足摺への道中スナップ 】



8:01「以布利」からへんろ路へ



「以布利」の海岸にて



9:13窪津の集落に下り付いて、休憩



▶ 10:14津呂あたりの善根宿にて、休憩。ブタンのお接待をいただく。



11:49足摺遊歩道から岬を見る。

以布利から遍路道をたどること約15キロ。8時に歩き始め、足摺岬の遊歩道入口に11時45分に着きましたから、3時間45分の道のりでした。なんと旅程表通りの時間、そして時速4キロちょうどの計算になります。途中何度も休憩していますので、私たちの実際の歩行速度は、時速5キロに近いのではと思いました。

足摺までの道は、所々に車道をショートカットする形で遍路道が整備されつつあり、20年前とは違った雰囲気、ずいぶん歩きやすく感じられました。

三十八番金剛福寺の続く遊歩道の途中からは、岬の断崖を見ることができ、

四国の最南端に来たという実感がわきます。

門前に着くと、先回りの稲田さんたちがお出迎え。懐かしい人に会う感じと、15キロ歩いてようやくたどり着いた充実感が交錯したのではないのでしょうか。先回り組と一緒に参りをしました。これで、太平洋に突き出た室戸と足摺の両岬に足跡を残すことができたわけです。掃除が行き届いた境内を出て、門前のレストハウスで紺碧の海を見ながら昼食。昼食後のわずかな時間で、展望台に行って、300度にも広がる紺碧の黒潮の海を眺めてきました。



「足摺で 何を願うか 嫁がせし父」





足摺岬の西海岸を走るバスは、足摺宇和海国立公園の変化に富んだ海岸美を次から次に見せながら走ります。中村駅には、午後3時に到着。なんと1時間45分もバスに乗っていました。

三十九番延光寺は、土佐「修行の道場」最後の札所です。平田駅からは、国道とのどか



15:05中村駅前電車の時間まで少し休憩。

菅野さんは、足摺岬で笠を購入。遍路笠がなく、観光土産の笠をかぶっています。どう見ても、鮎つりのおじさん風です。そういったら、つりが趣味とのこと。納得しました。

予定通り、午後1時13分のバスに乗り込み、土佐清水経由、朝出発した中村駅に戻ります。

三十九番延光寺へは、中村経由の東廻りと竜串・宿毛経由の西廻りがあります。歩き遍路はどちらを回っていこうか思案するところですが、ここからバス利用の私たちは、便の少ないバスの関係で中村まで戻り、再びくろしお鉄道に乗って、三十九番の最寄駅「平田」まで移動することにしました。



足摺岬バス停にて



土佐清水に行く途中のバスの中から、携帯電話のカメラでパチリ。

な田んぼ道半々ぐらいの2キロの道です。山門をくぐると、宿坊もやっていないのに巨大な庫裏、そして本堂、その脇に圓福寺のものより質素な大師堂と、大中小の順番で建物が並んでいます。以前、圓福寺の庫裏を増築する時、その屋根が本堂の屋根より高くなるとかならないとかで大工さんが悩んでいたことを思い出しました。土佐にはそんなことを気にする様子もないんだなあ複雑な感じがしました。

山門の脇に、梵鐘を背負った亀石像が祀られています。その昔、このお寺に出現した亀だそうです。そこで、三十九番



赤亀さんと記念撮影。みんな長生きできそうです。



16:26 延光寺に参拝



16:45 平田駅に戻る遍路道で



の山号は「赤亀山」となりました。

平田駅までもどり、午後5時32分のくろしお鉄道宿毛行きに乗車。10分で終着駅「宿毛」に到着。終着駅といえば寂れたイメージですが、いえいえこの宿毛駅は高架のステキな駅でした。ただ駅の先に広がる田んぼが、近代的な駅舎とギャップがあり、もうこの先はないぞとだめ押ししているようでした。

駅には、今晚の宿「国民宿舎・椰子」のバスがお出迎え。

冬の夕日が「だるま夕陽」といって見事なんだそうですが、あいにくの曇り空で拝むことはできませんでした。天気予報を気にしつつ、明日の雨がたいした雨でないことを祈るばかりです。

宿には、行儀の良い剣道部の中学生がたくさん泊まっており、雲行きは怪しくなっていました。ところがさわやかになり、美酒も進んだようです。



## 国民宿舎「椰子」での <sup>※</sup>【日乞いの宴】？



※日乞い:晴天になることを祈ること。

2月29日(日)

朝5時ぐらい、窓ガラスに打ち付ける雨の音で目ざめてしまいました。外は、雨・風の大嵐。「日乞いの宴」も効果なし。昨晚の天気予報どおりの荒れ模様。予定では、6時45分から朝食、7時45分出発。この大嵐が収まらなければ、今日の峠越えは無理かなと思いつつ、時計と空模様を交互ににらめっこ。朝食が終わる頃には、雨脚が弱まったように見えたので、予定通り峠越えを決行することにしました。

早めにロビーで待っていると、剣道部の中学生が学校ごとにまとまって、フロントに大きな声でお礼を言っては出発していきます。私たちも、そんな姿に励まされつつ、いざ国民宿舎を出発。峠入口まで、送迎バスで送っていただきました。先回り組は、宿毛駅まで送っていただき、そこから宇和島自動車の路線バスで四十番観自在寺に行くことになりました。

高知愛媛県境の遍路古道は、松尾峠越えとなります。目の前の雨に煙る山の中に松尾峠があるはずですが、上の方は雨で煙って見えません。晴れていれば頂上まで見えて足をひるませたかもしれません。幸いに見えなくてよかったこととしまししょう。標識に従って遍路道を進めども、一向に登りになりません。行く手の山はどんどん近づき、眼前に迫ってきているのですが、道は平坦のまま。なんと末恐ろしいことなのでしょう。そんな気持ちのあるとき、遍路の列はばらけずに一団のまま、固まって歩きます。平坦な先が読める道を歩くときは、それぞれが自分のペースで歩きますから、列



7:30 雨に煙る宿毛湾 国民宿舎「椰子」の窓より



は長～くなります。集団の心理は面白いものです。

集落を抜け、民家の間を通り、ようやく登り口にたどり着きました。ここからが峠越えの本番です。幾重にも折れ曲がる遍路道を、雨に打たれ無言で進みます。途中、休憩場があり視界が開けるところもありますが、雨に煙って景色どころではありません。晴れていれば、宿毛湾が一望に開け、土佐の海とのお別れもできたのですが、残念です。道は平坦になることもなく、どんどん上へと続きます。地図で見た限りでは、たいした距離はないはずなのですが、峠まで後〇〇メートルという標識があっても、とてつもなく長い距離に感じられ、修行の道場を終えるのは並大抵ではないと思知らされました。

ほぼ一気に登ることおよそ1時間、県境の松尾峠に着きました。峠には、是より伊予の国、宇和島藩であるとの石塔が建っており、修行の道場を卒業し、伊予の国「菩提の道場」へと入りました。

昔、松尾峠には茶店があって、旅人が一休みしていったのですが、昭和のはじめに茶店はなくなり、今は松尾大師堂という泊まれるお堂と東屋があるだけです。その東屋で、しばらく休憩し、一気の登りの疲れをとりました。雨の日には、道ばたに腰をおろして休むわけにもいかず、屋根のある東屋が何よりありがたいものです。雨の中、急な坂を登ってきたものですから、大汗をかいてカッパの中もぐしょぐしょです。雨は一向に上がる気配を見せません。

ここから、一本松の町まではゆるやかな下りが続きます。

この下りになってというか、愛媛県に入ってというか、石井監督のペースが急に上がりました。麓に降りてもそのハイペースは変わらず、まさに人が変わるとはこういうことかと、置いてきぼりをくらった私は思うのでした。しかし、それは変わったのではなく、潜在的に備わっていた力が発露しただけだと思います。次回の石井監督も楽しみです。



9:10 松尾峠の東屋にて みんな汗水まみれ



10:20 一本松休憩所 早咲きの桜が見事でした。

松尾峠越えは10キロのきびしい遍路道とっていたのですが、雨の中黙々と歩くスピードは、石井監督に引っ張られて速くなっていたようです。8時に松尾峠入口から歩きはじめ、10時20分には愛媛県の本松町の休憩所に着いていました。峠の東屋で20分ぐらい休んだことを差引くと、2時間で峠越え、なんと時速5キロではありませんか。あの登りを含んでの5キロは驚異的

です。潜在的な力を発揮したのは、石井監督だけではなかったようです。一本松バス停にいと、一台の軽トラックがみんなの脇に止まり、中から降りてきたおばちゃんがいきました。「あんた方、歩くの速いねえ。さっき山の道で見かけたと思ったら、もうここまで歩いて来きなさって・・・。」お大師さんが、おばちゃんの口を借りて言ってくれたおほめのことばだったのかもしれない。

予定では、一本松バス停で12時41分のバスに乗る予定が、11時6分のバスに乗車できることになりました。バス停に着いた時には、天気予報どおり雨も上がり、バス待ちの時間を利用して濡れたシャツを着替えることもできました。

このバスで威力を発揮するのが、「四万十・宇和海フリーきっぷ」の片道タイプです。高知から中村・宿毛・宇和島経由、松山まで、JR・くろしお鉄道・宇和島自動車のバスに乗り放題なのです。一本松から平城札所前まで約30分で、愛媛最初の札所四十番観自在寺に到着です。



11:05 一本松バス停でバス待ちのところ。雨は上がりました。



11:35 愛媛最初の札所「観自在寺」到着。



四十番観自在寺にて。  
寺名のとおり、ありのままの自分を観ることができた三日間  
だったでしょうか。



もやの中を行く石井監督



13:00 四十番のお参りを終えて、札所前バス停でバス待ちのところ。